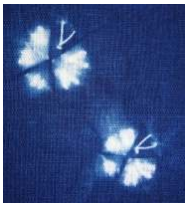


# うた ひつじの詩だより

2012. 7. 1  
毎月発行 No.136  
この夏は注目の品と  
いっしょにお届けします

ばたぼん（スウェーデンひつじの詩舎のウォルドルフ人形の伝え手）の交流会で、岐阜県多治見市へ行ってきました。多治見市と言えば、夏場の最高気温の高さで有名な土地。晴れたらどんなに暑いのかしらと楽しみでしたが、一日目は雨降り、二日目は過ごしやすいわやかなお天気に恵まれました。手仕事好きの集まりですので、朝から晩まで手仕事三昧、充実の一泊二日でした。まず、着いたその日は夕刻から谷口隆先生に綿の紡ぎと織りについて熱のこもったお話をうかがい、ご持参くださった手紡ぎの綿糸とお手製の可愛らしい織り機（目にした途端にみんな息のみました）を使って、細い紐を織りました。



2日目は、朝から藍染め。このところ藍染めにご縁のある私です。今回は、大鏝栄先生のやさしいご指導のもと、絞り、板締め、むらくも染めなどの技法から、一つを選んで体験しました。わたしが挑戦したのはちょうちょ絞り。布のたたみ方の妙で、ちょうちょの形が染め上がります。絞りをほどいてみると大きな蛾が出現することもしばしば。けれどもそこはみんな、「アゲハチョウよ！」と言い張ります。

庭で藍染めを楽しみつつ、部屋の中では順番にトルコ人女性のサフィエさんから、トルコ伝統のレース“イーネオヤ”の技法を教えてくださいました。縫い針一本で、レースが出来上がっていきます。何よりも、先生がお話になる日本語はとても少ないのに、ひとりひとりに丁寧に手元を見せてくださることで手仕事が伝わり、笑顔と、ほとんど「可愛い〜！」という一つの言葉だけで気持ちも通じ合うことの不思議を経験しました。とても細かい作業でしたが、みんな心から楽しんでいました。

いつにも増して、手仕事心をかきたてられ、一つ、二つ、三つも増えた、手仕事のポケットを大事に抱えて、大満足で家路につきました。



## 7月のテーブル 「星の子のおうち」

今月はトランスパレント紙を使ってみたくて作ったものです。  
7月は七夕なので、星や夜空をイメージしますが、新暦だと梅雨の真っ最中でなかなか星空はのぞめませんね。今年の旧暦の七夕は8月24日で、  
池上洋子

## ばたぼん通信

## お人形テーブルの創作おはなし

つたないお話しですが聞いて下さいませ。  
このお話しをつくったきっかけはこんな事から始まりました。  
ある友人のご好意から、コンサート会場隣のテーブルに雰囲気づくりの為にということで、季節物やテーマに添った羊毛お人形を飾る担当になりました。  
最初の数年は、毎回違うものを作ることや、締め切りのスリルなどを楽しんで作っていました。  
ある年、「リーサの庭で」というコンサートテーマの時の事です。  
楽屋に行くと、ライアー演奏の音のかたわらで、赤ちゃんにお乳を含ませているお母さんの姿をみました。それはとても幸せに満ちた、まるで絵画のようでした。周りでおしゃべりしている方々も含め楽屋全体があたたかいものに包まれている空気だったので。  
このことをきっかけに、そのとき飾ったテーブル人形の中から小人たちを選び、この三人を主人公にして毎回登場させる展示形式と小さな物語を紡いでいくことにしました。  
展示は一年に一回か二回でしたので、それに合わせ、お話しもやすみ休みの続きものにしました。

## 「小人たちの冒険」

2007～2011 年作

リーサの花畑には沢山の花が咲き乱れています。この庭の隅に三人のこびとが長いこと住んでいました。三人は毎日、花の精とおしゃべりをしたり、クモの糸であやとりをしたりして楽しく暮らしていました。ある日、ゆりの精とマーガレットの精に赤ちゃんが生まれたのです。三人はうれしくて嬉しくて、あかちゃんに何か贈り物をあげたくまりました。

なにをあげるか相談してはしばらく考えましたが、なかなか思いつきません。そこで「ふさわしい贈り物」を探しに旅に出ることにしました。



この花畑を三人は初めて出るので。朝、太陽が顔をだした頃、馬にまたがり出かけました。バラ夫人がそっと見送ってくれました。三人の行く先には白い道がみえます。

こびとたちの冒険は、青い炎の下で暮らす地底からはじまりました。地底のトンネルを這うように進んでいくと岩で出来た広いホールがあり、そこには薄青いマントを羽織った美しくも悲しい王子が住んでいました。この王子の手助けをしながら雨水の洪水工事や、見たこともない昆虫と戦いながら、そこに暮らすさまざまな人々と出会います。その時々、困難に打ち砕けそうになりながらも、自分を信じることを学び、かすかな希望を探しながら、三人のこびと達はいつしか少年となっていきます。

まもなくこの青い地底にもいつしか平穏が訪れてきました。そこで三人はこの世界に別れをつけ、今度はトンネルを上へ上へと登りはじめます。が、どうしたことか三人は離ればなれになってしまったのです。それぞれ途中でそれぞれいろんな出来事がありました。やっと出会えたときには、三人はたくましい青年になっていました。

三人が草原に立ち夜空の星をみつめ、風に吹かれていますと、船に乗った星めぐりの双子が降りてきました。夜空には双子星の吹く横笛が響き渡り、三人は星の世界へと船で運ばれていきます。

今日は七夕。天の川には光る星の砂を流す王子と、下流でその星砂をすくい取りながめる娘が見えました。この光景と、闇の星空をながれる星めぐりの音だけが聞こえてる・・・永遠・・・の中に三人は立っているようでした。

・・・・・・〈紙面の都合上途中省略しています〉・・・・・・

三人のこびとは、長い間こんなに遠くまで「ふさわしい贈り物」を探しにきていた事を、陽だまりの中であのリーサの庭を思い出していました。とても懐かしく思い三人は同時に帰ろうと思い立ちました。

あの赤ちゃんだった、ゆりとマーガレットの花の精は、どんな女の子になっているのでしょうか。

三人は太陽の光のそりに乗り、リーサの庭に降り立ちました。ちょうど花の精たちは踊りの練習をしているところです。

三人は、贈り物を手渡そうと花の精に近づきましたが、ひとりには手になにももっていません。でも、大丈夫。花の精には解っていたのです。贈り物は見えないけれど感じたことを。

今日もお日さまがリーサの庭をくまなく照らし、いつものように高く登っていきます。

地上ではライアーの調べが、夏の光とともに登っていきます。おしまい。

ここまでお付き合いくださりありがとうございました。

木下久子（つくば市在住）



スウェーデンひつじの詩舎は、8月12日(日)から19日(日)夏休みをいただきます。よろしくお願いたします。

「スペース ペレのあたらしいふく」7月の開店日  
2日(月)～14日(土) (日曜日を除く) 10:00～16:30

ホームページ <http://www.s-hitsuji.co.jp/>

編集担当：佐藤洋子

♥スウェーデンひつじの詩舎♥  
スペース ペレのあたらしいふく  
〒244-0001 横浜市戸塚区鳥が丘15-2  
TEL&FAX 045-881-6900,6665  
佐々木のアトリエ TEL&FAX 045-811-6708  
相談窓口(金) 寺田裕子 045-881-7035